

翻刻・『雨夜鐘四谷雑談』八編

光延真哉

本稿は、お岩・小平次の二つの怪談を結び付けて構想された合巻『あまのなほよつやぞうだん雨夜鐘四谷雑談』の八編（仮名垣魯文作・一猛斎芳虎貞画、文久二年へ一八六二）刊）の翻刻紹介を試みるもので、

「翻刻・『雨夜鐘四谷雑談』初編」（『東京女子大学紀要「論集」』第67巻第1号、二〇一六年九月）

「翻刻・『雨夜鐘四谷雑談』二編」（同右第68巻第1号、二〇一七年九月）

「翻刻・『雨夜鐘四谷雑談』三編」（同右第68巻第2号、二〇一八年三月）

「翻刻・『雨夜鐘四谷雑談』四編」（同右第69巻第1号、二〇一八年九月）

「翻刻・『雨夜鐘四谷雑談』五編」（同右第70巻第1号、二〇一九年九月）

「翻刻・『雨夜鐘四谷雑談』六編」（同右第70巻第2号、二〇二〇年三月）

「翻刻・『雨夜鐘四谷雑談』七編」（同右第73巻第1号、二〇二二年九月）

の続稿である。凡例は次の通りである。

【凡例】

一、底本には東京女子大学図書館所蔵の甲本「B913.5/R2/（1-8）」（初刷り）を用い、適宜乙本「B913.5/R2/b（1-6）」（後刷り）も参照した。図版には状態のより良い乙本（後刷り）を用いたが、同本が欠く見返しについては、甲本

(初刷り)の図版を掲載した。

一、句読点を補い、通行の字体を用いた。清濁は原本通りとした。

一、適宜漢字を当て、元の仮名をルビの位置に残した。ただし、原本で元から付されているルビについては()で囲み、これと区別した。

一、明らかな誤字については、ルビの位置に(ママ)と記した。

一、文中で会話文と判断できるところは適宜「」を補った。

一、通読の便のため、適宜改行を施した。

一、読み順を示す飛び印の記号は省略した。

一、丁数は、原本の丁付に従い、〈1オ〉〈1ウ〉の形で該当部の冒頭に示した。

一、角書、割書は「／」で示した。

一、判読不明な箇所は、その字数分を□で表記した。

一、その他の注記は「」で示した。

一、作品中には、今日の人権意識に照らして不相当と思われる表現が見られるが、時代的背景と作品の価値とにかんがみ、そのまま掲載することとした。

【翻刻】

〈上冊見返し〉

雨夜鐘／四谷雑談／八編上帙

仮名垣魯文作／一猛齋芳虎画 錦昇堂版

〈1オ〉

前に河竹其水大人、此草紙の六編を、著れし中に片瀬の場なる新内節の門附が、彼明烏の淨瑠璃にて阿竹を落す加文句は、戯場の脚色を、神史に模せし、筆のトンク、拍子幕、看官挙てその場を感称ぬ。是等は大人が平常の口調にて、深く意匠を勞されし、業にはあらぬ一時の戯作。莫遮数度誦読せど、声節線の三拍子、うちそろひたる新内を、聞に等しく倦ことなき、名に負鶴賀の妙曲と、名題の著作郎が妙案を、未嘗青き小雀が、説次たる鳴呼なる業は、明烏には似もつかぬ白癡烏の翹ばたき、浴室の中なる杜撰文章、テンチン鈍間の口三絃、猫皮にはのぬカンちがひ、仮名違ひさへ熟も考正さで、これまで綴てはきつれども、具眼の人の閲ことあらば、脇の下より冷汗にて、夢の泡雪消入思ひと、胸の戲房を明鴉、後の誹譏やのこすらんく。

文久二年戊辰(印) 仮名垣魯文記(印)

〈1ウ・2オ〉

神谷伊右工門

直助権兵衛

伊右工門妻於岩

常悪き鴉も雪のあした哉 はせを

〈2ウ〉

雨夜鐘八

又六が門に入けり寒念仏

無縁寺門番塔助

〈3オ〉

八へんよみはじめ行く水の、流れの苦界果てしなく、浮き川竹の濁り江に、染まる心の鬼柳、お塚は胸に逸物の、あれば思はぬ三七と、今宵密かに忍び出で、手に手をとりの鳴かぬ間に、同じ旅路の死出三途、急ぐ最期の田圃道、男はそれと白露や、無分別なる置き所、草の茂みに鳴く虫も、身に染みわたる川風は、早河原（か／はら）ぞと烏羽玉の、闇路をたどる煩惱の、犬の声さへ物凄く、喘ぎく／＼て千寿（せん／じゆ）の橋の、たもとに至れば三七は、誘ふお塚を見返りて、声密やかに言へるやう、「コレのうお塚、こゝが千寿の大橋にて、かねて約せし最期の場所、この川中へ諸共に、身を投ぐるとも亡骸の、別れく／＼にならぬやう、互ひに帯と扱きの端、結ぶ縁の浅からぬ、契りは深き入間川、流れの末は弘誓の神、いづくの浦にか着し折り、死骸を一つに葬られ、せめて印の碑に、信士（しん／じ）真如と二人が戒名、並べて彫らせんためにしも、肌につけたる二十両、使ひ残りや身の回り、売り代なして持て来たほどに、帰らぬ旅の路用には、事欠かぬのみ安心ぞ。覚悟は良きか疾くく」ト、促す男の愚かしき、言葉をお塚は心の内に、あざ笑ひつゝ、面には、わざと萎れし素振りにて、「昨夜交はせし兼言に、違はで今宵諸共に、連れ退き給ふ嬉しさに、死ぬる今際も憂はしからず、覚悟はかねてきはめておれば、今さら何をか期し侍らん。追手のかゝらぬその暇に」ト、扱きを解けばつぎへ

つぎ三七も、帯解きかけて端と端、結ぶ手元も見へ分かぬ、あやなき闇の足元に、疾くより伏せしと思しき野伏せり、まどひし菰をはね除けて、思ひ設けぬ三七が、足捌取りて引き倒せば、「あはや」トもがくを起こしもやらず、取つて押さへるその暇に、お塚が差し出す細帯を、手早く受け取り三七が、首にまどひて二絞めに、ぐつと絞むれば七転八倒、のたうち回りて死んでけり。

お塚は辺りに気を配り、「ライ小介どん〇 じゃアねへ、今からこちの人。のろまはすつぱりお陀仏か。「イヤモウすつぱり息の根を、踏み潰された蟊蛙、ぎうともスウとも言やアしねへ」。「そんなら早く一件を」。「ヲット合点」ト死骸の懐、手を差し入れて引き出す胴巻、貫目を引いてにつこりうち笑み、「濡れ手で粟の二十両、こいつを路用に高ぶけて、いづくの裏屋店借りの、九尺二間の侘び住まひ、貧乏世帯もてめへと共に、暮らすうちには木に餅もできるに、モウ引導が済んだなら、仏を早くごんぶりと」。「水葬〔する/そう〕だけに世話はねへ」ト、首にまどひし扱きを掻い取り、死骸を抱えて欄干より、下へごんぶと水煙。「かうしてしまへば後腹痛めず。しかし追手がかゝるは必定。こゝから二人が身を投げた、振りに見するは幸ひの、最前解いた野郎の帯と、彼奴めを絞めたこの扱き、これを二タ筋欄干へ、ソレ、かう懸けておくのが山」。「さうしておけば右の下へ左上よりわつちとおめへが、逃げたは誰も気がつくめへ。ちつとも早く」ト身繕ひ。

小介はお塚が手を取りて、橋を向かひへうち越す折りしも、来かゝる一人の旅人が、提げたる小田原提灯の、灯し火風に消されじと、厭ふてかざす袖屏風、行き違ひさまお塚と小介が、怪しき素振りに思はずも、差し出だしたる

〈4ウ・5オ〉

つゞき提灯の、火影に二人は袖几帳、小介は手早く小石を拾ふて、提灯目がけはつしと打てば、狙ひ違はず灯し火消えて、持つたる提灯とり落とす、闇に紛れて二人の者は、いづくともなく落ち失せける。旅人跡を見送りに、「危ないことと不審の面持ち。落とせし提灯手探りに、拾ひ取らん」ト絡ぐる手先に、思はず触るものあれば、取り上げ透かし眺むるに、守り袋と思しき一品、「後の証拠」トうち領き、懐中なしつ提灯を、拾ふてこの場を立ち去りける。

○此旅客の本名、後の巻に氷解。

はなし二ツにわかる。○こゝにまた、泡之進が惣領子なる、小吉の小幡小平次は、坂田藤十郎が弟子となりて、都四条の家に止まり、年月を経るほどに、その生れつき愚かしけれど、万のここと正直にしてまめやかなれば、師の藤十郎の心に適ひ、我が子の如く上へ下よりいたはりて、かつ俳優の道何くれと、心を込めて教ゆるほどに、好きこそ物の上手なれと、世の諺に言へる如く、その性の次へ

〈5ウ・6オ〉

つゞき愚かしきに似ず、芸は至つて巧者なれども、形小さくむくつけなれば、大芝居へは出るこゝたはず、稻荷芝居に雇はれて、旅にのみ世を渡りけるが、この小平次に一つの妙あり。怪談狂言を勤むる折に、幽霊に扮するとき、その技名立たる役者も及ばず、故に彼が渾名を呼びて、幽霊小平次と言ひける。

しかるにその師「し」藤十郎が、妻なるものは先に身罷り、一人のせがれ東蔵が、人となるを楽しみに、その後妻をも迎へさりしが、年ごろ召し使ふ端女に、おさめといへるが甲斐甲斐しく、家内のことを賄ひて、男世帯を練り回す、その性の賢げなると、顔形の見にくからぬに、主はやもめの聞きさみしく、朝夕夜具の上げ下ろしに、ふどこのお

さめに手を付けしが、ついにおさめがもてなしの、一方ならぬに現を抜かし、後は本妻のごとくになして、全ての家事「か／じ」を任せける。

このおさめ、**二の巻**へ**一**のつゞき始めのうちには身を慎み、東蔵をもいたはりて、実明らしく行ひけるが、年を経るに従ひて、藤十郎をいたく侮り、東蔵を軽しめ疎み、おさく／＼害を振る舞ひつゝ、剩へ弟子のうちに、坂田半六といへる俳優と、いつの暇にか姦通なし、より／＼主の留守を窺ひ、密会することしば／＼なり。主はこれをゆめにも知らで、そのまゝに過ごしけるが、常々深く酒を嗜み、東蔵は**十五次**へ

へ6ウ・7才

つゞき小平次が二十七になりける春、舞台を勤めて家に戻り、おさめ、半六、出入りの医師數垣文庵など、共に、更長くるまで酒酌み交はし、うちさゝめきてありけるが、いかゞはしけん藤十郎、俄に心身悩乱して、虚空をつかみて苦しみける故、付き添う者共驚き慌て、様々と介抱するに、居合はせたる文庵は、早速に脈を取り、「これ年ころの酒毒、一時に発せしものにして、殊の他の難症なり。命は請け合ひ難けれど、心行かしに捨て薬、調合して參らせん」ト、配剤播る間に藤十郎は、おびたゞしく血を吐きて、遂にむなしくなりけるほどに、東蔵、おさめ、小平次、半六、その余の眷属前後に取り付き、声を放ちて嘆きけるが、かくてあるべきことならねば、この由歌舞伎の座元を始め、縁者の方へ告げ知らせ、型の如くに野辺送り、跡懇ろに弔ひける。

これよりおさめは万のこと、心のまゝに振る舞ひて、主に等しき家の子の、東蔵を酷く扱ひ、やゝもすれはいとはしたなく言ひ罵り、小平次が旅より歸りて、家の内にある時は、下部の如く追ひ使ひ、その身は文庵、半六と、暇あれば酒宴を催し、上見ぬ驚の我がまゝを、さしたる縁者もあらざれば、誰あつて咎むる者なく、さる故に半六と、誰

憚らず臥所を共にし、良からぬことのみ工みける。

ある日東蔵は、歌舞伎の休みに、小平次を従へて菩提所へ至りし留守、おさめは半六諸共に、部屋に籠もりて酒汲み交はず、折柄例の藪垣文庵、入り来たりての三つ金輪、差しつ差されつたけなはに、及びし時しも文庵に、向かひておさめがさやくやう、「先生さんのお陰にて、邪魔を払ふて此人と、誰憚らず楽しみを、きはめてはるるもの、親方の息あるうち、本妻披露をしておかぬが、今となつての大後悔、何かにつけて邪魔になる、アノ東蔵が今はまだ、懐育ちの子どもだけ、こつちが鱈を伸ばしてゐれど、モウ二、三年経つうちには、生分別が浮かみたし。半六さんどわたしが仲の、かうした始末に目が付いて、元の身分を言ひ立てに、親では内証の目論見を、悟つてどんな意趣返しを、喰はさりやうかも計られず。それを思へは今のうち、ノウ半六さん、かのことに。」「されば姉御の言はる、通り、双葉のうちに刈らざれば、斧を用ゆる憂いありと、舞台のつきへ

大当／千客万来 大々叶

□孟齋／魯文
ゑびすや

〈7ウ・8オ〉

つゞき上でよく言ふせりふ。かういふ危ふい狂言を、書き下ろしから二番目まで、作者と頼む文庵さん、どうか趣向はあるまいか」ト、言はれて文庵小首を傾け、「愚老が医家はいつもの外療、かの一葉が即座の効験。しかし先頃親方に、用ひた趣向も古めかしく、親子一つに同じ場の、道具を用ゆるものならば、目立ちて人の不審せん。こゝは一

番目先を変へて、じやくの来る趣向がハテ、ありさうなものじやなア」ト、しばし考へ横手を打ち、「ヨツト有馬の人形筆。愚老が家伝秘宝の奇薬「き／やく」に、死してほごなき男子の脳みそ、一味合はせて飲ます時は、呼吸詰まりて唾となること疑ひなし。これはいかゞ」ト誇りがに、言ふをおさめはうち聞きて、「いつそのことに息の根を、止めたるは思へども、それではおまへの言ふ通り、まだ親方の日柄も立たねば、ひよつと世間の口の端に、かゝつてみればこつちの身の上。その妙薬で東蔵めが、口のきかれぬ病となれば、この世にあつてない同然。なんばう親の跡式でも、唾では舞台が勤まらず。ところで二代目藤十郎の、名前を譲るは半六さん」。右の中へ左上より「首尾よく家督相続して、大立者となりすまし、表向きではお袋様、内証は夫婦のちんく／かも、煎鳥鍋のうまい仲」。首尾良くしおほすその時は、先生さんにしつかりと。「褒美の金と抜き打ちに、ばつさりやらるゝ半道敵。危ない仕事」ト、うち笑へは、半六は膝すり寄せ、「まづ本読みは済んだれど、得難い品はかの脳みそ。右下へ左よりこれはどうしてくんなさる」ト、言はれて文庵頭を掻き、「さて、そこどころは何かに紛れ、トンと心が付かなんだ。死してほごなき死骸の頭を、砕いて取るは苦もないが、丁度間に合ふ新仏が、あれば良いが」ト当惑顔。おさめはにつこりうち笑みて、「それには丁度打つて付け、親方がおめでたくなつて、今日まで廿日余り、寺も墓場も余所他を、暇を入れて訪ねるより、おまへもかねて知つての通り、雀の森の更雀寺「かう／じやくじ」に、葬つてある親方の、死骸を密かに掘り出して、かのつぎへ

こゝの絵解き、下の巻にて自づから分かる。

かづら

「つぎ」一葉を取つたなら、そんなに骨は折れまい」ト、言はれて文庵小膝を打ち、「したり妙計、楠木、張良、いはゆる灯台下暗し。愚老もそこにはさつぱりと、気が付かなんだばさらんだ、せんだまかしよと今宵のうちに、雀の森へと一走り」。「善は急げしや御苦勞ながら、爛の良いのをもう一つ、あがつてそろく願ひます」。「日差しは丁度八つ下り、行き着くうちに日が暮れやう。サテもう一献頂戴」ト、干したる盃取り上ぐる、**右下へ左上より**折柄襖を開く音に、びつくり見返る三人。おさめは「誰ぞ」トうち見やれば、下女のお雪が岡持を、提げておづく顔差し出だし、「お詠への蒲焼きが、和田から只今参りました」ト、差し出せば波打つ胸を、おさめは落ち着け素知らぬ顔にて、「置いて行きな」ト吸い殻の、煙管をボンと灰吹きへ、はたくを潮に襖を立て切り、お雪は勝手へ立ち去りける。

「一丁おいてまへのゑとき」○東藏と小平次は、かくとも知らず菩提所に、詣でて我が家へ戻り道、早家近き四つ辻に、立ちてこなたをうち見ゆるは、まさしく下女のお雪なれば、「何しておるぞ」ト思ふ間に、二人の姿をお雪は見やりて、慌てふためき馳せ寄りて、「こは若旦那、小平次殿も、只今**中へ下より**お帰りなされしか。我が身は火急にお二人へ、お話し申し上げねばならぬ、一大事の侍るからに、先よりこゝにてお歸りを、待ち侘びて候ひぬ。お内にては憚ることも候からに、いづくへかこの身をしばし伴ひ給へ。時移りてはおさめ様、半六殿に気取られ、難儀候ては若旦那の、御為ならじ疾くく」ト、急ぎ立つ言葉の分き難く、訝しけれど常よりも、いとまめやかなるお雪が忠心、子細ぞあらんと**つきへ**

そほうんどん

二八「そば／うん□□」□や

〈9ウ・10オ〉

〔つゞき〕東蔵は、小平次にうちさゝやき、一町ばかり後へ戻りて、ある待ち合ひの茶店の奥に、入りて子細をうち聞くに、お雪は辺りを見返りて、声を潜めて語るやう、「今日しもあなたは小平次殿と、共にお墓へ詣で給ひし後にて、例のおさめ様、半六、文庵と、三人して部屋に籠りて、親方のお日柄とても経たぬうち、生魚調理、手酒汲み交はし、何かひそく語らふ様子、その折り我が身詠へやりたる、鰻の岡持携へつゝ、部屋の襖を開けんとして、聞くとはなしにしかくくの、工みの密事が耳に入り、話しの途切れを待つうちに、かやうくどさゝやきし」ト、藤十郎に毒を盛り、酒毒のためと言ひ拵へ、なほまた東蔵を唾にせんと、葉のうちへ加ふる一葉、死してほどなき人間の、脳みそを取らんとため、今宵かの文庵が、雀の森なる菩提所へ、赴くことまで落ちもなく、「立ち聞きせしかば胸うち騒ぎ、このこと包みておる時は、東蔵様の御身の上と、思ふものから落居もやらず、さりどて帰り給ひし折り、告げ申さんには人目あり、とやせんかくと〔次へ〕

先祖万礼

福寿海無量大阿足

〈10ウ〉

〔つゞき〕案じ詫び、宿まで行くど断り言ふて、この四つ辻に最前より、帰らせ給ふを待ち侍りぬ。かやうの訳で候へば、御身の上の御用心、暫時も油断はなり侍らず」ト、聞くより二人は呆れ果て、しばし言葉もなかりしが、東蔵は「病死と思ひし父が毒殺せられし」と、初めて聞いて湧き返る、涙は膝と両袖を、絞るばかりの憂き思ひ、無念は

さながら肉叢の、骨を放れつ腸を、断つばかりなる心地して、そばに見る目の小平次も、共に嘆きに沈みしが、元より鈍き性なれば、この期に及びて良き思案を、巡らすべくも泣くばかり。東蔵はやゝあつて、涙を抑へ言へるやう、「極悪非道の三人の奴原、かゝる工みのありぞとは、神ならぬ身の知らざりしを」下の巻へ

魯文作 芳虎画

〈下冊見返し〉

雨夜の鐘四谷ざう談 八編下帙

魯文著述／芳虎画

錦昇堂寿粹

〈11才〉

上の巻よりつゞきお雪が図らす聞き知りて、告ぐるといふも父上の、無念のなき魂中有に迷ひて、彼らの悪事を知らしめ給ふどころにこそありつらめ。我このまゝに家に戻らば、姪婦、奸夫のためにしも、いかなる畏にかゝらんも、計り知れねばこれよりすぐに、父上の兄弟分なる玉川仙之丞殿の方に至り、この趣きを語り聞こへ、とくと談合なせし上、今宵を過ぎさず三人の者を、捕らへて父の仇を報はん。そちはこれより家に戻り、知らぬ素振りをしておれかし。小平次来よ」ト身繕ひ、涙を拭きて立ち上がるに、小平次、お雪も共に立ち、茶代払ふてこの屋を立ち出で、お雪に別れて東蔵は、小平次従へ大宮なる、玉川仙之丞が元を指して、飛ぶが如くに馳せ去りける。

○さても敷垣文庵は、七つ下りと思しき頃、坂田藤十郎が家を出で、雀の森に至る頃、日は山の端に落ち果てて、文目も分かぬ闇となり、さらに行く手も分かざれど、案内知りたる更雀寺「かうじやく／＼」の、裏手に回りにて、手に、まだ宵なれど在家を放れ、いともさみしき墓原に、人のおるべきやうなれば、辺りをきよ／＼見返りて、手をもて敷垣かき探り、犬溜りより這ひ入りて、墓原に近付きつゝ、藤十郎を葬りし、置土のほとりに至るに、はるか隔ちし本堂の、禪の勤めのほかに聞こえ、梢に叫ぶ鼻の、声も哀れを添ゆれども、元より不敵の文庵なれば、少しも臆せず湯灌場の、錠捻ち切りて戸を開き、内にありあふ鍬取り出し、これを担げて藤十郎が、墓石取り除け葬りて、日柄の経たねば置土の、固まらざるを幸として、鍬おつ取つて堀り起こすに、この時俄に一陣の、冷やゝかなる風吹き起こり、しう／＼として梢を鳴らし、輝く星も雨雲に、空覆はれていどしく、辺りは暗く手元も分かず、さすが不敵の文庵も、たゞ何となく物凄く、鍬の手休めて佇むに、怪しや数多の墓原の、影に当りて陰々と、一つの陰火燃え出で、そこよこよと閃き巡れば、思はず鍬を投げ出だし、そのまゝそこにへたばりて、震へおのゝきある折柄、枯れ草茂る辺りにて、虫の声かと諳つばかり、さめ／＼と泣き悲しむ声、いと哀れに聞こえければ、文庵怖々頭をもたげ、陰火の影に透かし見るに、丈いと長き黒髪を、乱せし様はさながらに、風に揉まるゝ枯れ野の薄、顔青ざめて口よりも、生、血滴り身にまどふ、白き薄物は朱に染めなし、朦朧たる一人の男の子、暗がりのうちに立ちて臆気に現れたり。文庵一目見るよりも、身のうち痺れ足萎へて、逃げ走るべきやうもなく、またひれ伏して口のうちに、たゞ阿弥陀仏弥陀仏と、唱へて生きたる心地もなし。

この時幽霊、白糸の如き手をもて、面に隠れる黒髪を、掻き払ひ又さめ／＼と、うち嘆きやゝありて、しわがれたる声を出だして言へるやう、「我は汝が毒酒にかゝりて、先の日はかなく世を去りたる、坂田つきへ」

つぎ藤十郎が亡き魂の、仇を報はんためにしも、これまで現れ来たれるなり。汝、おさめ、半六らと謀りて我を毒殺し、今またせがれ東蔵をも、片輪となさんそのために、我が亡骸の脳みそを、取り得んと墓をあばきし極悪非道、我その恨みを晴らさんと、閻羅王に訴へしかば、閻王よりしはしの間、暇を下し給はりて、我をこの土に來たらしめ、汝が命を取らせらる。さりながら汝今、先非を悔いてこれまでの、悪事を懺悔したらんには、しばらく命を助けし。さもあらずば速やかに、地獄に出て行き限りなき、呵責を受けさせ苦しむべし。いかにく「ト差し寄りて、息も絶ゆげに言へるを聞き、文庵面色枯れ木の如く、戦慄きく両手を合はし、叫ぶが如く言へるやう、「愚老人の病を癒やす技鈍ければ、療治を乞ひ葉を求むる病家なく、さるからに朝夕の、煙の代もいと乏しく、好ける酒さへ飲み得ねば、ふとおさめ殿と半六殿の、悪事に組みして毒薬を、調合なして酒に注ぎ、三人謀りて親方を、毒殺なしても何飽かずや、今日しもおさめ、半六の、頼みによりて東蔵殿を、片輪となさん目論見にて、その一葉を取り得んため、今宵親方の死骸の頭を、砕かんために來たれるなり。されどもかゝる悪工みは、愚老が勧めし技ならず、みな半六と右へ左へおさめ殿が、心に出でたる悪事に侍れば、我がなす技は諺の、貧の盗みの類ひぞと、許し給はゞこれより後、長く追善仏事を営み、御身の成仏得脱を、ひたすら念じ祀らんほどに、恨みを晴らして我が一命を、助けてたべよ阿弥陀仏、頓証菩提」とうち詫びる。

時しも後ろの大墓の、陰より等しくばらばらと、現れ出でたる捕り手の面々、ひれ伏す敷垣文庵を、やにはに捕らへてひしくくと、高小手手に縛めければ、文庵ますくうち驚き、「さては地獄の午頭馬頭たち、早くも迎ひに來たりしか。許し給へ」ト叫ぶにぞ、捕り手の頭人進み出で、忍び提灯皆へ、次へ

〈12ウ・13オ〉

つゞき振り照らしつ、言へるやう、「やをれ悪坊主、我が輩は午頭馬頭の、類るにあらず。六波羅殿の仰せを受け、汝を捕らゆるためにしも、疾くよりこゝに忍べるなり。者共、こやつを引き立てて、こゝかしこまで急げよ」ト、下知に組子は畏みて、夢に夢見し文庵を、引き立て、こそ立ち去りけれ。

○元来坂田藤十郎の幽霊は偽物にて、すなはち木幡小平次なり。今日凶らずもお雪が告げにて、東蔵と諸共に、師の横死を聞くど等しく、大宮なる玉川仙之丞が元に至りて、しかぐゝとおさめ、半六、文庵らが、工みのほどを聞きしまゝ、語りて仇をつきへ

〈13ウ・14オ〉

つゞき復すべき、計策を乞ふほどに、元より兄と頼みたる、藤十郎が死したるは、三人の者が毒害せしと、聞きて仙之丞一度は驚き、又一度は齒噛みをなし、「このこと片時も捨ておかれず」ト、狂言作者の何某を、呼びて願書を認めさせ、人を添へて東蔵を、六波羅へ訴へさせ、又小平次には「しかぐゝせよ」ト、歌舞伎に用ゆる幽霊の、鬘と白き薄衣を、持たして雀の森に遣はし、幽霊に出で立たせ、文庵が来たるを計り、脅して自然に白状するに、それより先に六波羅の、捕り手の面々更雀寺の、墓原に忍び入り文庵が白状を、聞くど等しく現れて、かく生け捕りに及ひしなり。その折り陰火「いん／くわ」と見せたるも、芝居にて用ゆるどころの、焼酎火と言ふものなりとぞ。

○こゝにまた、おさめ、半六の二人の者は、文庵を出だしやり、とかくするうち火灯し頃になりしかば、座敷に散らせし杯盤を取り収め、東蔵、小平次が帰り来んと、素知らぬ振りして待つといへども、かの兩人は日暮れても、なほ戻らねば不審せしかど、半六と臥所を共にするには、彼らのおらぬこそ後ろやすしと、心に留めず宵の右へ左よりう

ちより、部屋に籠もりて同じ臥所に、枕を並べ雨となり又雲となる、思ひは巫山の夢心。早三更と思しき頃、門の戸
險しく叩く者あり。「さては東蔵、小平次が帰り来たりしものならん」と、思へどさらに起きもせず、とかくするう
ち下女お雪が、目覚めて起き出て「誰そ」ト問ふに、「玉川仙之丞の元より」と、答ふに念なく掛金外し、戸を引き
開くればばらへト、一時に込み入る捕り手の大勢、半六、おさめが臥所の襖、開くると等しく狼狽へて、逃げんと
焦る兩人を、押さへて繩をうち掛けつ、六波羅指して右下へ左中より引き立て行きぬ。これみな玉川仙之丞が、計策
によるどころにして、東蔵が孝〔か／う〕を哀れみ、小平次、お雪が忠義に恵む、天の妙慮と知られけり。

かくて次の日に至り、六波羅の庁にては、おさめ、半六、文庵らを引き出だし、昨夜文庵が雀の森にて、自ら白状
せし件りを、姪婦奸夫に言ひ聞かするに、二人は抗ふ言葉なくして、悉く白状しければ、まづ三人の罪人を、人屋に
つなぎ仙之丞、東蔵、小平次らを召し出だし、三人の白状なせし由言ひ渡され、仙之丞が義氣〔ぎ／ぎ〕智計のほど
を勸賞ありて、白金五片を給はり、次へ

へ14ウ・15オへ

つぎ下女のお雪にも青緗五貫を給ひつゝ、なほ東蔵の後ろ見を、仙之丞に命ぜられければ、みなく、上の賞罰の、
正しきを感謝しつ、拝して家路に帰りける。さるほどに、おさめ、半六、文庵らは、日ならず洛外を引き回され、重
き罪科に行はれぬ。

かくて仙之丞は東蔵が後ろ身として、万事を補佐し又小平次も、三十路に近くて妻もなく、家もなければ幸ひの、
縁なりとてお雪を妻に、嫁せんとまづこのことを、二人に告ぐるに、小平次は一議に及ばず、お雪も「都の生まれな
れど、幼き頃父母を上へ下より失ひ、些かの知る辺の世話にて、この家に奉公なせしにて、頼り少なき身の上なれ

ば、よろしく計らひ給はれかし」ト、言ふに仙之丞は喜びつゝ、お雪が宿に掛け合ふに、宿なる者も納得しければ、やがてつきへ

賽銭箱

〈15ウ・16オ〉

つき黄道「くわう／だう」吉日を選みて、二人を娶せつ。坂田の家の、近きほとりへ新たに家を借り受けさせ、夫婦をこゝに住まはするに、お雪はその性貞節にて、小平次が鈍きを疎まず、仲睦まじく暮らしけるが、その次の年、一子をもうけ小太郎と、名付けつゝ、手底の玉挿頭の、花と愛で慈しみ育てける。これはこれ、後の話しなり。

まへよりのゑどき身に染むる、冬の夜風の九十九折り、茂る木の葉は枯れ落ちて、山また山にうち続く、空も心もかき曇る、二十日亥中の月代も、木陰に暗き道奥の、行く手隴の夫婦坂。こゝに小介とお塚の二人は、旅より旅に日を暮らし、道々兄よ妹よと、同胞の如くにもてなし、塩竈詣でと言ひ拵へ、旅籠に宿る折り節は、相宿の旅人の色好ましく、愚かしきを見かけて、お塚は小介と馴れ合ひ、美人局に持ちかけて、手切れと名付け強く挑み、調度の旅の足元を、見かけて路銀を貪り取り、これを身過ぎとなしつゝも、後の報ひは白川の、関うち越へて遙々と、小田川の宿化け地蔵を過ぎて、こゝにぞ差し掛かりぬ。時しも霜月末なれば、夜は行き来の人もなく、連れにはぐれし雁が音の、空に羽叩く音のみして、険しき山路の四の巻へ三のつき仔まひ、木々「きゞ」の気配の凄まじく、そゞろに寒き山嵐襟元袖に吹き入れて、忍び難なく飢ゑにさへ、臨みて足も抄らぬ、折りしも坂のつきへ

〈16ウ・17オ〉

「つきあなたに当りて、火影かすかに見ゆるにぞ、人家のあらは立ち入りて、今宵の宿りを求めんものと、火影を目当てに辿り行き、そのほとりに近付きつと見れば、行く手に三人の男の子、襦袢単衣に繩の帯、あるは破れたる布団をまとひ、松葉木の枝折りくへて、焚き火にこそりて身のうちを、暖め酒の徳利が、口より口へ移し飲み、うちぎ、めきてありけるが、近付くお塚小介をうち見て、互に目配せ立ち上がり、行く手を支へてだみ声張り上げ、「コレお旅人、見れば夜道の山坂を、美しい姉へと道行は、定めしうまい約束の、駆け落ち者と見立ては違はぬ」。「かういふこともあらうかと、**上**へ**下**より夜網を張つたる雲助の、帳場外れの山中に、待てば甘露の徳利酒」。「飲み代ならぬ身の代の、命代はりに路用から、身の皮までも置いて行け。命ばかりは助けてやるは」。「それを四の五の抗はゞ、たぬにならぬ」ト脅しの言葉、弱みを見せじと小介は身構へ、「ヤアほざいたり。行く空の、月に邪魔なす雲助めら、足弱連れと侮つて、分に過ぎたる高強請り、物騒承知の夜の旅、腕に覚えの業物の、光る酒手をもらはぬうち、きりく消えてなくなれ」ト、腰に帯びたる一腰の、柄に手をかけ眼を配れば、「エ、面倒な、畳んでしまへ」ト、隠し持つたる獲物をうち振り、三人一度に馳せかゝれば、小介は一腰すらりと引き抜き、先に進みし雲助が、額をてうと斬り付くれば、「アッ」トたぢろくその後へ、**つきへ**

〈17ウ・18オ〉

つゞき 二人一度に右左、打つてか、れば身をかはし、一生懸命滅多打ち、一人の敵ばらりずん、浴びせかけたる血煙に、残る二人は辟易して、後をくらし逃げ走る。手負ひは小介にむしやぶりつくを、振り解きて足下に踏み据へ、止めの刀と諸共に、後ろに並ぶ稲塚の、陰より閃く切つ先に、小介が肩先はつさりと、斬り下ろしたる拳の牙へ、急所の深手にさすがの小介、「アツ」トばかりに仰け反るにぞ、思ひまうけぬお塚が仰天、この時稲塚掻き分けて、血潮に染みたる段平引き提げ、現れ出でたる一人の曲者、雲間を出づる月影に、お塚はそれと透かし見るに、年の齡は四十路に近く、眼鏡に鼻高く、月代の跡長く生いいて、身には黒き袷衣の、申の時ばかりなるをたゞ単衣、着なしつゝも裾を高く引き上げたるが、朱鞆の二腰落としに帯び、蠹く小介をはつしと蹴返してより、懐に手を差し入れ、引き出だしたる金財布、抜き持つ白刃に紐ふツト、切つて放せば渡さじと、白刃を杖に鑿り寄り、手負ひを足下に踏み倒し、逃げんとしたるお塚が袖を、しつかと握りて傍なる、庚申塚に腰うち掛け、段平土に突き差しつゝ、お塚が面をさし覗き、「コレ姉へ、さほど怖がるものではねへ。山賊、夜盗、追剥ぎも、元を質せばたゞの人、まさか鬼でもねへけれど、色と酒とに持ち崩す、身から出でたる鎗に、右と左の脇腹へつゞきへ

此図は於塚がおくれと云し幼稚をりに有し行状也。其は九編に解

〈18ウ・19オ〉

つゞき 穴の悪事と承知して、切り取り強盗荒稼ぎ、こゝは所も夫婦坂、二人手に手を鳥が鳴く、吾妻男と女の夜道網を張らせた手下の奴らが、手に余りたる様子を見て、お見舞ひ申した段平の、細工は流々巻き上げた、財布は確か

二十両、同じ冥途の道連れに、返す刀で女もと、思ひの外の上代物、売つて金にといふところを、こゝは一番色敵、物は相談気を変えて、俺が女房になる気はねへか、いやとぬかしやア一口商ひ、女、返事はド、どうだ」ト、あくまで不敵の面輔、元より悪事を好めるお塚、頼りと思ふ小介に別れ、差し当たりたる身の寄る辺、彼が心に任せんと、性根を据えて身をすり寄せ、「足らはぬこの身を女房に、持つてやらうが真実なら、それはわたしが勿怪の幸ひ、どうぞ見捨てておくれでないヨ」ト、寄り添ふお塚を引き寄せて、「さう往生が決まつたなら、これから末は似た者夫婦、結ぶ悪縁悪事の片人」。「鬼の女房にや鬼神とやら、女だてらに恥づかしい。悪いことには抜け目のない、鉤の手長い生れ付き、どういふ因果の因縁やら、七ツの年から泥水に、染まる苦界の長年季、九ツ十の頃よりも、見る物毎に欲しくなり、小盗み板の間昼買い出し、枕探しは半商売、あんまり退いた仲ではないヨ」ト、聞いてにつくり小膝を打ち、「それじやアまんざら素人では、内証で冷めた商売上がり、こいつはよつほど右へ左より話せるはへ。したが、いつまでこゝにやアゐられぬ。女夫の堅めは隠れ家で、床の寢酒の色直し」。「積もる話しをしつぱりと」ト、手を取り交はし立ち上がれば、まだ息絶えぬ手負ひの小介、「思へばく口惜しい」ト、這ひまつはるを踏みしめつゝ、ぐつと一刺し止めの刀、死骸を谷へ蹴落として、「女房来い」ト手を取りて、隠れ家指して馳せ去りける。

○そもこのお塚といへる毒婦は、先に鎌倉にて罪せられし、高田大八が惣領にて、その妻お佐雅が産みの子なり。かのお佐雅、播磨にて大八、彦平に置き去りせられ、憤りに耐えかねて、重き病の身ながらも、夫の跡を慕ひつゝ、その折をり二才の娘をおくれを次へ

〈19ウ・20オ〉

つゞき肌はだに抱いだきて飾磨しからまを立たち出いで、同おなじ国くになる夢野ゆめののの原はらに、来きたりし時ときしも、板付いたつき重おもりて絶たえ入いりし折をり、一ひとり人の

旅僧こゝをうち過ぎ、孤子のおくれを哀れみ、拾い取り立ち去ること二編に説けり。

この旅僧は別人ならず、鎌倉なる無縁寺の住僧 空月和尚にて、諸国修行の帰路に臨み、図らず女子を拾い取り、道々在家に立ち寄りて、もらひ乳なして鎌倉に、抱き帰りて門番の、塔助が妻乳飲みを失ひ、乳のありしを幸ひに、彼らに預けて成長させるに、おくれが七ツといへる年、人かどわかしに奪れて、行方も知れずなりしこと、これも五編に詳しく出だせり。

かのかどわかしの曲者は、高田の下部疋平にて、大八が後添ひなる、お琴が家にいたぶりに、行きしに主は留守なれば、虚しく戻る道すがら、塔助が伴ひたる、おくれが子ぶりの良きものから、遊びに売らんとかどわかし、泣き喚くをすかしなため、好める物を求め与へ、ようやくに手なづけつゝ、中山道に誘ひ行き、深谷の駅なる知る辺の旅籠屋に伴ひつ。己が姪なる者の由に言ひ捨て、年一杯三十兩に売り代なし、瞬く暇にかの金も、みな賭け事に失ひ尽しぬ。おくれはこゝに売られ来て、幼き者のことなれば、小職として召し使ふに、人となるにしたがひて、その性極めて悪賢しく、あまつさへ、小盗みをする癖さへありて、内外の者の持てる品を、何くれとなく奪ひ取り、客の座敷に立ち入りて、その相方の右へ左よりおらざる暇には、枕のほとりを掻き探し、財布の銭をくすね取り、表に使ひする毎に、みな買ひ食ひに失ひぬ。

さるほどに、おくれが十才になりける年、その軒続きの旅籠屋にて、主が居間に置きたる金、五十兩紛失しければ、主は驚き胸うち騒げど、居間に置きたる金なれば、「他より人の来べきにあらず。畢竟この盗賊は、召し使ひの者にやあらん、荒立て、詮議せば、人は出で、も金は出ず。用こそあれ」と思案を定め、その夜や内の召し使ひを、残りなく呼び集へ、改めて言へるやう、「今日我が居間に置きたる金、財布のまゝに紛失なせり。次へ

中仙道深谷宿

〈20ウ〉

つゞきその暇わづか片時も、経つや経たずのことにして、殊更真昼外の方より、賊の入るべきやうはなし。つらく
思案を巡らすに、この盜賊は汝らが、内に必ずあるべきぞ。殊に大金このまゝに、うち捨ておかれぬ故をもて、直
に公に訴へ出で、上の詮索願はんと、分別せしが待てしよし、この盜賊は全くに、我が召し使ひの者の、内にあるに
相違のあらざれば、それを荒立て公沙汰に、なさは却つて汝らが、ためなるまじと思ひ止まり、別に詮議の工夫をな
せり」ト、器の水に何やら注ぎ、切り火うちかけ眼を閉ぢ、口のうちにしばしの間、真言をうち念じ、これを居並ぶ召
し使ひの、男女の前に差し出だしぬ。畢竟、主が数多の者に、対して何をか言ひ出でるや、そのなすことの趣きと、か
つはおくれが垣の外に、窺ふ様と瘧平に、財布を預くる故由は、九編の始めに説き出づべし。めでたしくく。

○この絵解き、九編に見えたり。

魯文作

芳虎画

錦昇堂文庫

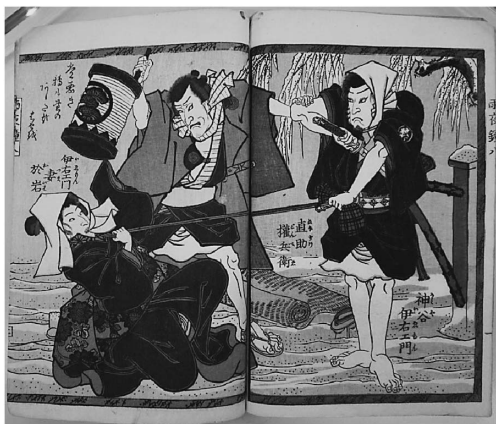
【図版】

上冊・下冊表紙



上冊見返し（初刷り）・1才





1ウ・2才



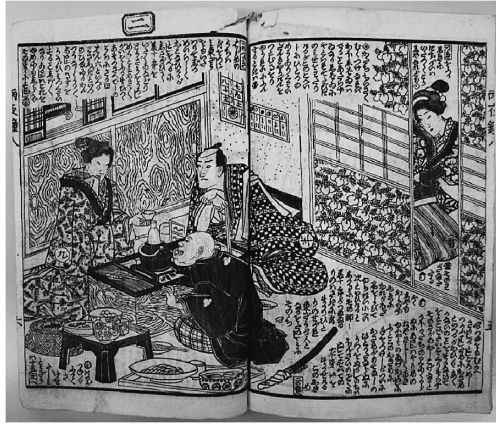
2ウ・3才



3
ウ・4
才



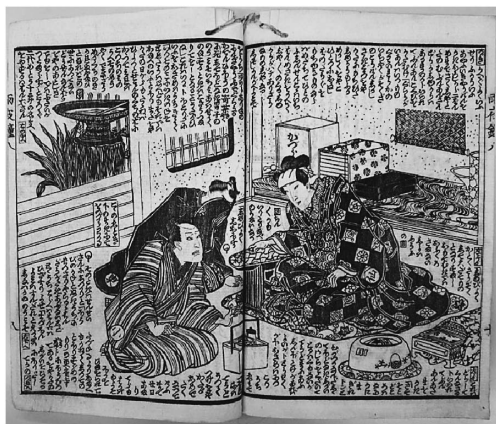
4
ウ・5
才



5
ウ・6
才



6
ウ・7
才

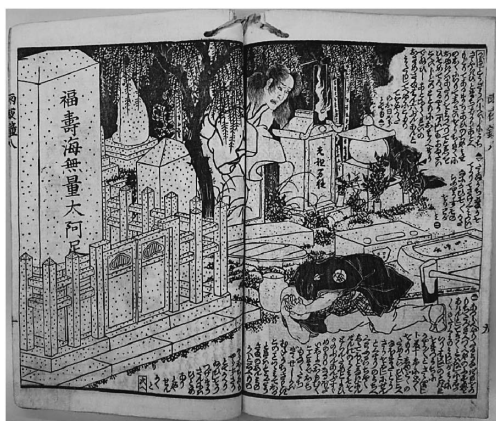


7
ウ・8
才



8
ウ・9
才

9ウ・10才



10ウ・上冊後ろ見返し(初刷り)



下冊見返し(初刷り)・11才



11ウ・12才





12
ウ・13
オ



13
ウ・14
オ



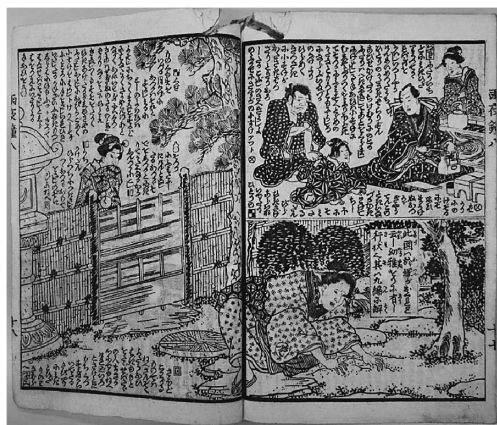
14
ウ・15
才



15
ウ・16
才



16
ウ・17
オ



17
ウ・18
オ



18
ウ・19
オ



19
ウ・20
オ

20ウ・下冊後ろ見返し



下冊後ろ見返し(初刷り)



キーワード

合巻、四谷怪談、お岩、小平次、柳下亭種員、河竹黙阿弥、仮名垣魯文